

イネ縞葉枯病に対する育苗箱施薬剤の防除効果

[要約]

イネ縞葉枯病の発生地域において、媒介虫であるヒメトビウンカを対象に育苗箱施薬剤を施用すると、イネ縞葉枯病の発病株率は低く抑えられ、減収を軽減できる。

農業総合センター農業研究所	平成25年度	成果 区分	普及
---------------	--------	----------	----

1. 背景・ねらい

近年、県西地域でイネ縞葉枯病の発生が増加傾向にあり、被害も発生している。イネ縞葉枯病による被害を回避するには抵抗性品種の作付けが有効であるが、本県の奨励品種のほとんどは縞葉枯病抵抗性を持たないため、本病の媒介虫であるヒメトビウンカに対する薬剤防除が必要である。そこで、ヒメトビウンカを対象とした育苗箱施薬の発病抑制効果と減収軽減効果を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) ヒメトビウンカを対象に育苗箱施薬を行うと、イネ縞葉枯病の発病株率は無処理と比較して低く推移する（図1）。
- 2) 4月末から5月中旬移植の水稻において、ヒメトビウンカを対象に育苗箱施薬を行うことにより、イネ縞葉枯病の発病株率を低く抑え、減収を軽減することができる（図2、図3）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本成果は、筑西市の現地圃場における平成24年及び25年の試験結果である。
- 2) イネ縞葉枯病以外の病虫害（いもち病、イネドロオイムシ、イネミズゾウムシ等）が収量に影響を及ぼさない条件下での試験結果である。
- 3) 育苗箱施薬に用いる薬剤は、茨城県病虫害防除所から平成25年11月26日に発表された「病虫害速報 No.6」に掲載されているものを参考とする。
- 4) イネ縞葉枯病が多発生する地域では、ヒメトビウンカの地域内の発生密度を抑制する目的で、抵抗性品種の栽培においてもヒメトビウンカに対する薬剤防除を行うことが望ましい。
- 5) 試験に使用した農薬は、平成26年2月12日現在、水稻に登録のある薬剤である。

4. 具体的データ

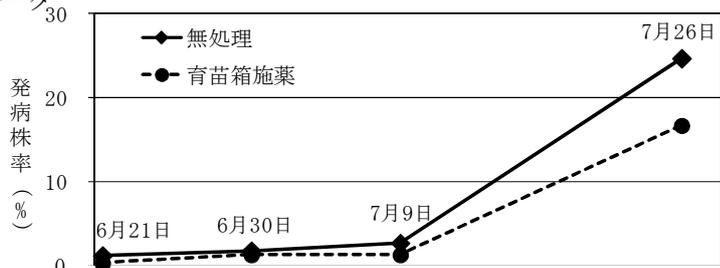


図1 現地ほ場における育苗箱施薬の有無と発病株率の推移（平成25年）

注1) 試験は、筑西市西榎生において品種「ふくまる」（移植日：4月29日）を用いて行った。

注2) 育苗箱施薬剤はクロチアニジン粒剤（商品名：ダントツ箱粒剤）を供試した。

注3) 調査は、1区300株2反復で行った。

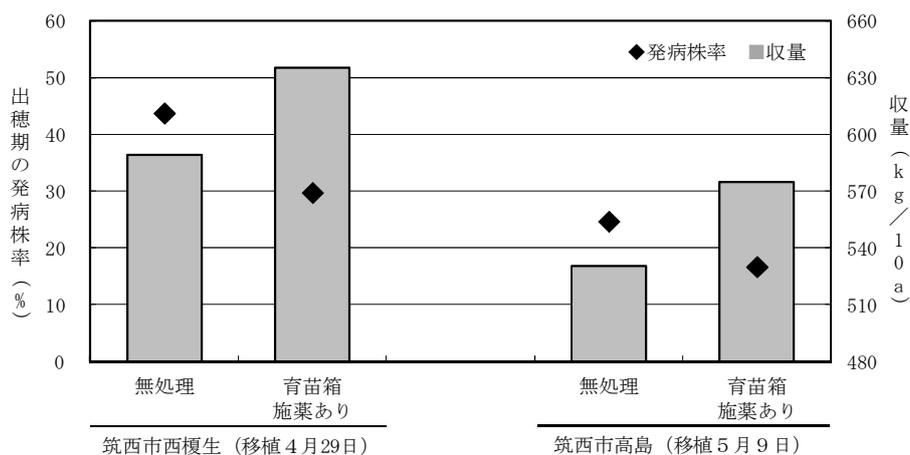


図2 現地ほ場における育苗箱施薬の有無とイネ縞葉枯病発病株率および収量（平成25年）

注1) 試験は筑西市において品種「ふくまる」を用いて行った。

注2) 育苗箱施薬剤はクロチアニジン粒剤（商品名：ダントツ箱粒剤）を供試した。

注3) 発病調査は7月26日、収穫調査は8月26日に行った。

注4) 収量調査は発病調査をもとに各試験区の発病株率を代表する3箇所から60株を刈り取って行った。調製は1.85mm篩で行った。

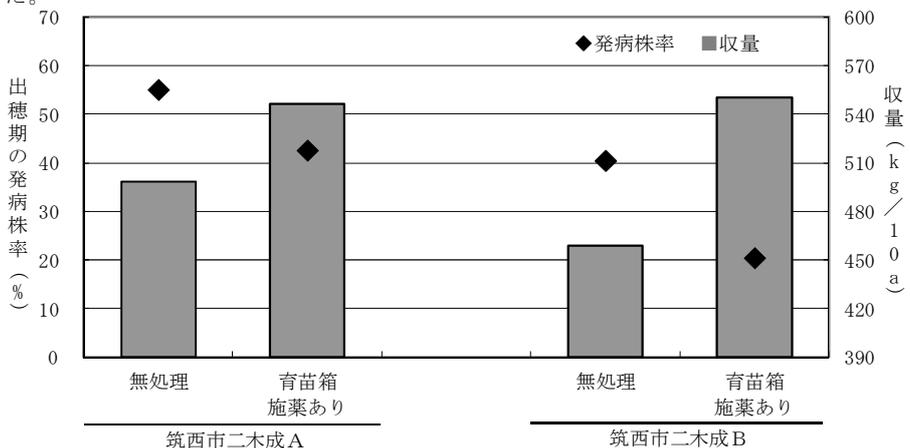


図3 現地ほ場における育苗箱施薬の有無とイネ縞葉枯病発病株率および収量（平成24年）

注1) 試験は筑西市において品種「コシヒカリ」（5月15日）を用いて行った。

注2) 育苗箱施薬剤はクロチアニジン粒剤（商品名：ダントツ箱粒剤）を供試した。

注3) 発病調査は8月8～9日、収穫調査は9月9～10日に行った。

注4) 収穫調査は発病調査をもとに各試験区の発病株率を代表する3箇所から54株を刈り取って行った。調製は1.85mm篩で行った。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

農作物有害動植物発生予察事業・平成24～平成25年度・病虫研究室